

<b>〔科目名〕</b> 学習導入演習	<b>〔単位数〕</b> 2単位	<b>〔科目区分〕</b> アカデミック コモンベーシックス
<b>〔担当者〕</b> 横手 一彦	<b>〔オフィス・アワー〕</b> 時間:開講時に提示する 場所:横手研究室(六階 616)	<b>〔授業の方法〕</b> 演習
<b>〔科目の概要〕</b> <p>大学で〈学ぶ〉ということは、どういうことなのだろう。高校までの勉強と、どこまでが同じで、どこからが違うのだろう。大学一年、入学した春学期の、そのような戸惑いは当然のことであり、また自然なことでもある。</p> <p>この科目は、粗々にではあるが、「学習」という土台の上に、大学における一つの筋道を示すような形で、そのような疑問や不安に答えるようにする科目である。そのため、新しい学問領域に接するではなく、〈学ぶ〉ということに対する応答が目的の一つである。そのため、入門的な内容となる。</p> <p>ひとり一人が、今後の四年間をみすえ、その初年度の春学期に、〈学ぶ〉という自覚と、〈学ぶ〉という姿勢を自らに引き寄せる。教員の立ち位置は、それらを側面的に支援するところにある。側面的であるという以上に進むことが出来ない。〈学ぶ〉ということは、〈勉強する〉ということとは、やはり違う。その部分を、最も大切したい。それらを、自分が文章を書く、自分が論文を書くという方向へと段階的に進める。</p>		
<b>〔「授業科目群」・他の科目との関連付け〕・〔なぜ、学ぶ必要があるか・学んだことが、何に結びつか〕</b> <p>それまで、気づかなかったことに気付く。知らなかったことを知る。それらは、単純なことのようで、それほどに簡単ではなく、意外なほどに深い意味を持っている。そこに、自らの意欲との関わりを見出すこともある。</p> <p>自分が〈学ぶ〉一面に、自分以外の人間から〈学ぶ〉という別の面を重ねることで、これまでの自分の〈学ぶ〉という行為に自覚的になる。これは大切な点であり、それに正面から向き合おうとすれば、相手(他者)は、意外なほどに手強いし、また凄い存在である。</p> <p>これまでと、今に立ち返り、もう一度見つめ直せば、必ずしも十分ではなかった自分に気づく。この隙間(すきま)を埋める。自分が、自分の、である。誰かが手助けしてくれるが、その代理や代弁を務めることはない。</p> <p>大学で〈学ぶ〉というプロセスは、約(つづ)めれば、物や事や人や考え方や情報などに向き合い、そこから特定の領域を対象化し、そこに自らの課題を発見する。そして、分類し、分析し、考察を深め、独自に調査し、さらに議論を重ね、論究を続ける。そのような、連続する流れとしてある。その成果の多くは、レポートの形とにまとめられる。それらを、意図的に、段階的に、踏み上がる。そのことで、自らが〈学ぶ〉という自覚と、自らが〈学ぶ〉という姿勢を引き寄せる。それらのことは、大学という場で〈学ぶ〉基礎となる。</p> <p>そこでは、自分が自分を励ます以外に手立てはない。自分が書いたレポートに、自分を励ます自分の力が宿る。〈学ぶ〉階梯を自立的に歩み、そこから習得したものは、大学四年間の〈学び〉の要になる。</p>		
<b>〔科目の到達目標(最終目標・中間目標)〕</b> <p>〔中間目標〕          幾つか問題について意見を交換し、相互の理解を深める。それらを文字化して表現する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 方法的接近(本という形態・基礎的な理解・幾つかの簡素な論理・古い図書館・外国の図書館・今の図書館)</li> <li>2. 方法的接近の具体例(級友や図書館文献や文献検索やネット情報)</li> <li>3. 口頭発表(本に学ぶ)</li> </ol> <p>〔最終目標〕          自分が、〈学ぶ〉主体であると改めて気付き、実感的に知り、実践を重ねる。小レポートや課題レポートの作成を通じ、自らが〈学ぶ〉ことに対し、自覚的に、意欲的になる。それを最終目標とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 実践例に学ぶ(批判的な論究)</li> <li>2. 課題意識、関連資料の収集と整理、分析的思考と論理に基づいた構想力。それらを文字化する(レポート作成)</li> </ol>		
<b>〔学生の「授業評価」に基づくコメント・改善・工夫〕</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 教壇に立つ側が饒舌に過ぎる場合がある。それを自戒し、教場における学ぶ主体は、学生であると自重する。</li> <li>2. 教員の用意する話題が、脈絡に欠けると受け取られた時があった。一部の話題を組み立て直し、流れのある展開となることを心掛ける。他方に、多種、多様であるという側面は維持する。</li> <li>3. レポートの書き方について、事例を紹介し、その実践を求める。</li> </ol>		

<p>〔教科書〕</p> <p>なし。</p>	
<p>〔指定図書〕</p> <p>なし。</p>	
<p>〔参考書〕</p> <p>佐藤望編著『アカデミック・スキルズ大学生のための知的技法入門』（第2版、2016、慶應義塾大学出版会）など。</p>	
<p>〔前提科目〕</p> <p>なし。</p>	
<p>〔学修の課題、評価の方法〕(テスト、レポート等)</p> <p>教場における積極的な姿勢や課題解決への意欲など2割、口頭発表1割、小レポート2割、課題レポート5割。</p>	
<p>〔評価の基準及びスケール〕</p> <p>A: 100点～80点  B: 79点～70点  C: 69点～60点  D: 59点～50点  F: 49点～0点</p>	
<p>〔教員としてこの授業に取り組む姿勢と学生への要望〕</p> <p>自らが学ぶという意欲。  級友と学び、級友が学ぶ姿勢への共感。  レポートという表現行為への深い関わり。</p>	
<p>〔実務経歴〕</p> <p>該当なし。</p>	
<p>授業スケジュール</p>	
<p>第1回</p>	<p>テーマ(何を学ぶか): 科目導入の初期段階への接近</p> <p>内 容: 1.大学というところ                    2.大学生ということ  3.自分が学ぶ                                    4.高校生と大学生                    5.中学生と高校生と大学生</p> <p>教科書・指定図書</p>
<p>第2回</p>	<p>テーマ(何を学ぶか): 教員による科目内容の方向付け</p> <p>内 容: 1. 各自の事前学習            2. 大学図書館というところ    3. 図書館図書の選定(新書版程度)  4. 口頭発表(本に学ぶ5分程度3人)    5. 西行 桜 桜の花                    6. 広瀬淡窓</p> <p>教科書・指定図書</p>
<p>第3回</p>	<p>テーマ(何を学ぶか): これまでの自分 今の自分 これからの自分</p> <p>内 容: 1. 自分の過不足                    2. 今の自分に必要なこと  3. 方向性・構想・具体的な展開    4. 考えるということ</p> <p>教科書・指定図書</p>
<p>第4回</p>	<p>テーマ(何を学ぶか): 多様な知1——教科書と教科書以外に学ぶ1</p> <p>内 容: 1. 科学的思考                                    2. 大学という教育機関  3. 他人が組み立てた思考方法を学ぶ    4. 自分と自分以外との関わり    5. 研究ということ</p> <p>教科書・指定図書</p>



